

制御焦点が創造性に与える影響

—義務・理想自己プライミングに着目して—

長谷 和久 神戸学院大学心理学部

The effects of regulatory focus on creativity: Focusing on ought vs. ideal self-guide priming

Kazuhisa Nagaya (Department of Psychology, Kobe Gakuin University)

Previous research on regulatory focus has shown that a promotion focus (which is elicited by an approach orientation) facilitates creativity more than does a prevention focus (elicited by an avoidance orientation). In this study, it was examined whether this apparent superiority of promotion focus in promoting creativity is found when using another regulatory focus manipulation—that is, a manipulation that does not also elicit an avoidance orientation. This method was termed "ought vs. ideal self-guide priming." One hundred sixteen participants were asked to write down perceived duties (prevention focus) or ideals (promotion focus) to manipulate their regulatory focus. Subsequently, they completed the Unusual Uses Test (specifically, providing as many creative uses for a brick as they could). This test can assess various aspects of divergent thinking such as fluency (total number of responses), average creativity (average creativity score for the responses), and the number of creative ideas (number of creative responses that exceed a midpoint). Although there was no effect of the regulatory focus manipulation on fluency and average creativity, people with a promotion focus showed a higher number of creative ideas. The implications of this were discussed with reference to the approach/avoidance motivation.

Key words : regulatory focus, promotion focus, prevention focus, creativity

キーワード：制御焦点, 促進焦点, 予防焦点, 創造性

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2018, Vol.1, No.1, pp.5-10

創造性とは「新奇なアイデアの創出や、有効な問題解決方策の導出」と定義され (e.g., Amabile, 1983; Baas, De Dreu, & Nijstad, 2008), 社会心理学を含む広範な心理学領域において、創造性がいかなる要因によって左右されるのかについて研究が重ねられてきた。創造性を左右する要因としては、個人の感情状態 (De Dreu, Baas, & Nijstad, 2008) や、流動性知能 (Silvia, 2015), マインドワンダリング (山岡・湯川, 2016) といったものがあげられるが、とくに社会心理学領域では人の目標志向性の差異が創造性に与える影響について研究がなされてきた。

人の目標志向性を特徴づける支配的な理論として Higgins が提唱した制御焦点理論を挙げることができる (Higgins, 1997)。制御焦点理論は人間を含む多様な動物において確認される快樂原則—快に接近し、不快を避ける—を発展させるかたちで提唱されたも

のである。制御焦点理論が提唱される以前には、人には快に接近する接近動機づけ、不快を避ける回避動機づけの2種類の行動制御方略があると考えられていた。この一方で、制御焦点理論が想定する方略は、促進焦点 (promotion focus) と予防焦点 (prevention focus) と呼ばれる。促進焦点は利得の有無に焦点化し、利得のある状況 (+1) に接近し、利得の無い現状 (0) からの回避を志向する。これとは反対に、予防焦点は損失の有無に焦点化し、損失のある状況 (-1) を避け、損失の無い現状 (0) への接近を志向する。このように制御焦点理論では、促進・予防焦点にそれぞれ質的に異なる接近・回避の対象があると想定している点で、従来の快樂原則や、接近・回避動機づけとは異なる枠組みを用いて、人の目標志向性を捉える理論である。そして制御焦点の差異は、選好 (Boldero & Higgins, 2011) や、道徳判断 (Gino &

Margolis, 2011), といったさまざまな側面に影響を及ぼすことが明らかにされている。

また, 各制御焦点に特徴的な判断過程の存在が指摘されており, 促進焦点は変化に対して開放的であり, 新奇な刺激や未知の課題に対してより関心が高まることが確認されている。反対に予防焦点は, 既知の課題を継続する現状維持傾向が強いことが示されている (Lieberman, Idson, Camacho, & Higgins, 1999)。そして Friedman & Förster (2001) はこうした判断過程の特徴をもとに, 制御焦点が創造的パフォーマンスを左右する要因であるとの仮説を立てた。具体的な仮説は, 新奇な刺激に対して開放的な促進焦点は新しいアイデアの創出を促すため, 創造的パフォーマンスに肯定的な影響をもたらす一方で, 現状維持傾向が強い予防焦点は否定的な影響をもたらすというものであった。彼らの実験では制御焦点をプライミング手法によって操作した後に, 創造性課題が実施された。制御焦点を操作するためのプライミング手法とは, 参加者に紙上に描かれた迷路を, 迷路内に布置されたねずみに代わり, 解くことを求めるものであった。このとき促進焦点条件では, ゴール地点にネズミにとって利得であるチーズが描かれ, 「チーズを食べる」という利得への接近を目標とする迷路となっていた。対して予防焦点条件では, 迷路の枠外にねずみの天敵であるフクロウが描かれ, フクロウからネズミを逃がすために迷路を解くものになっており, 「フクロウに食べられることを避ける」という損失回避が目標になっていた。こうしたプライミング課題の後に, レンガの創造的な用途を制限時間内に記述させる Unusual uses test (以下, UUT とする) が実施された。UUT は新奇なアイデアを創出する能力, すなわち拡散的思考を測定する創造性課題として代表的に使用されるものである。実験の結果, 迷路課題によって促進焦点が活性化した参加者は, 予防焦点が活性化した参加者に比べて, 回答の平均的な創造性 (以降では, 「創造性平均」と呼ぶ) が高く, さらに, 創造性が高く評価される回答 (以降では, 「創造的な回答数」と呼ぶ) が多いことが明らかになった。さらに Baas, De Dreu, & Nijstad (2011) は, Friedman & Förster (2001) の結果を直接的に再現したことに加え, 創造的パフォーマンスの側面の 1 つである「流暢性 (各参加者の UUT への回答の総数)」においても, 促進焦点の優勢性が示されることを明らかにした。

このように制御焦点が創造的パフォーマンスに影響し, 促進焦点は予防焦点に比べて創造的パフォーマンスを高めるとの知見が一貫して得られているものの, 上記の研究では同一のプライミング手法 (すなわち, 迷路課題) によって制御焦点を操作しており, 異なる操作方法を用いた際も知見が再現されるのかについては明確ではない。制御焦点を実験的に操作する方法としては, 迷路課題のように利得への

接近によって促進焦点を, 損失の回避によって予防焦点を活性化する方法の他に, 参加者自身の理想や望みを記述させることで促進焦点を, 義務や責任の記述によって予防焦点を活性化する方法 (以降では, 義務・理想自己プライミングと呼ぶ) が存在する (e.g., Liberman et al., 1999)。とくに迷路課題の操作は接近傾向と回避傾向の活性化によって促進・予防焦点それぞれを活性化させるものであるが, 後者は質の異なる接近対象 (理想または, 義務) によって促進・予防焦点を活性化するものであり, 回避対象を含まないという点において大きな違いがある (Higgins & Cornwell, 2016)。既述のとおり, 促進・予防焦点はそれぞれに特徴的な接近・回避対象があると想定する制御焦点理論では, どちらの操作方法も制御焦点の操作として適切であると考えられる。しかしながら近年の研究によって, 接近対回避によって制御焦点を操作する迷路課題と, 接近対象を質的に変化させることで制御焦点を操作する義務・理想自己プライミングでは, 異なる影響をもたらすことが指摘されている (Chen & Bei, 2017; Summerville & Roese, 2008)。たとえば, 迷路課題による操作は, 行動賦活系 (BAS) や行動抑制系 (BIS) といった, いわゆる接近・回避動機づけ側面を活性化するものの, 義務・理想自己プライミングではそうした効果は確認されていない (Chen & Bei, 2017)。回避動機づけを扱った先行研究では, 回避動機づけが創造性を低下させる要因であることが明らかにされている (e.g., Friedman & Förster, 2005)。このため, 回避動機づけを活性化しない義務・理想自己プライミングは, 回避動機づけを活性化する迷路課題に比べて, 創造的パフォーマンスに対して与える影響が弱まる, すなわち予防焦点と比較したうえで, 促進焦点の優勢性が示されない可能性が考えられる。

こうしたことを踏まえて本研究では, 義務・理想自己プライミングによって制御焦点を操作した場合も, 迷路課題を用いた先行研究と同様に, 創造性課題に対する促進焦点の優勢性が確認されるのかについて検討することを目的とした。これまでも義務・理想自己プライミングの実施後に, UUT が行われた研究は存在していたものの, そこでは促進焦点の優勢性が示されていなかった (Sacramento, Fay, & West, 2013)。しかし, 当該研究では, UUT における流暢性 (すなわち, 回答の総数) にのみ着目しており, 各回答がどれほど創造的であるかについて評価されていなかった。このため, 本研究では流暢性といった量的な側面だけでなく, 定性的な側面である回答内容の創造性についても評価したうえで, 義務・理想自己プライミングが創造的パフォーマンスに与える影響について検討した。

方 法

実験参加者 関西圏の私立大学に通う116名（男性35名、女性81名）が実験に参加した。参加者の平均年齢は、18.43歳（ $SD=0.90$ ）であった。

制御焦点の操作 参加者の制御焦点は Liberman et al. (1999) を参考に、義務・理想自己プライミングによって操作した。詳細には、参加者自身が現在、果たさなければならないと考える「義務」や「責任」の記述に加え、それらが幼少期からどのように変化したのかについて記述させることで予防焦点を活性化させた。一方で、達成したいと考える「願い」や「目標」を記述させることと、それらが幼少期からどのように変化してきたかについて記述させることで促進焦点を活性化させた。回答に制限時間は設けなかったが、3分が経過するまでは次の課題に進めないように設定してあった。また、どちらの制御焦点条件に割り当てられるかは、参加者ごとにランダムに決められた。

創造性課題 創造性を測定する課題として、提示された対象の創造的な用途を制限時間内に記述する UUT を使用した。本実験における UUT は「レンガ」に関する創造的な用途を4分間でできるだけ多く記述するというものであった。そして得られた回答の創造性の程度は、実験の目的を知らない2名の大学院生によって個別に評価された。評価に先立ち、創造性を評価するための基準について評価者に説明された。評価する際の基準は、「非凡さ（頻繁に想起されない回答であること）」、「遠隔性（一般的用途からかけ離れたものであること）」、そして「賢さ（機知やユーモアに富んでいること）」であった (Friedman & Förster, 2001; Silvia et al., 2008)。これらの基準に基づいて、各回答は「1: 全く創造的でない」から「5: 非常に創造的だ」までの5件法で評価された。

また評価対象となる UUT への回答は、アルファベット順に並べ替えたうえで、評価者に渡された。この手続きは、回答者による影響や、回答の順序による影響を打ち消し、さらには同内容の回答がまとまりをつくるため、一貫した評価がなされやすくなることを意図したものであった (Silvia et al., 2008)。また、2名の評価者による評価の級内相関は高く ($[ICC] = .56$)、一致した評価がなされていることが確認されたため、平均したうえで分析に使用した。

そして、本研究では UUT のパフォーマンスのうち、Friedman & Förster (2001) を参考にして、「流暢性」「創造性平均」「創造的な回答数」を従属変数とした。このうち「流暢性」は各参加者の UUT の回答の総数に相当し、「創造性平均」は参加者ごとにその参加者の回答に対する創造性の評価を平均した値を指している。また、「創造的な回答数」は創造性の評価が中点 ("3") を超える回答の数を参加者ごとに合算したも

のであり、創造性の評価が中点を超える回答には「砕いて沸騰石として使う」や、「割って顔料にする」といったものがあつた。

制御焦点尺度 制御焦点のパーソナリティ傾向を統制するため Lockwood, Jordan, & Kunda (2002) で開発された制御焦点尺度の邦訳版 (尾崎・唐沢, 2011) を使用した。本尺度は、18項目で構成され、9項目ずつで促進焦点傾向と予防焦点傾向を測定するものである。先行研究において本尺度は、迷路課題と同様に接近・回避の側面から制御焦点の個人差を測定するものであると指摘されており (Chen & Bei, 2017)、促進焦点を測定する項目には「私はたいてい、人生において良い成果をあげることに意識を集中している」といった利得への接近に関する項目が多数を占め、予防焦点の項目には「どうやったら失敗を防げるかについて、よく考える」といった悪い結果への回避傾向を尋ねる項目が占める。このような特徴をもつ本尺度の促進焦点項目は UUT の流暢性と正の相関を示し、予防焦点項目は負の相関を示すことが明らかにされている (Haws, Dholakia, & Bearden, 2010)。本研究では、促進焦点に関する9項目と予防焦点に関する9項目をそれぞれ平均したものを促進焦点得点 ($\alpha = .81$)、予防焦点得点 ($\alpha = .84$) としたうえで、統制変数として使用した。

手続き 大学の講義時間中に実験の参加募集を行った。参加募集にあたり、実験は「創造性に関する心理学的検討」を目的とする20分程度の実験であると説明された。このときに、実験で尋ねる質問項目数とともに、創造性課題の具体的な内容について説明された。また倫理的配慮として、実験参加は自由であること、回答はどの段階でも中止できること、さらには実験に参加しない場合も参加者の不利益にはならないことが書面と口頭で説明された。以上の説明の後に実験参加に同意した参加者は、その場で参加同意書に署名するよう求められた。そして、実験参加に同意した参加者は、各自の空き時間にオンラインのパソコンから実験に参加した。

実験では、参加者ははじめに制御焦点尺度に回答した。続いて「えんぴつ」を例に UUT の回答方法の説明がなされた。回答方法に関する説明の後に、「レンガ」の創造的な用途を記述する本番の UUT へ回答することが求められた。

なお、本研究は実施大学 (同志社大学) に設置された研究倫理委員会の倫理審査において事前に承認を受けたうえで実施された。

結 果

実験に参加した116名のうち4名の参加者において、創造性の評価が不可能な回答が半数以上を占めたため、以降の分析から除外した。創造性の評価が不可能とされた回答は、「固い」といったレンガの性質に関する回答や、「レンガ男」といった用途が不明

Table 1
Correlations and descriptive statistics

Variable	M	SD	1	2	3	4
1. Prevention focus subscale	5.05	1.08	—			
2. Promotion focus subscale	4.91	0.91	.10	—		
3. Fluency	5.28	2.61	-.25**	.03	—	
4. Average creativity	1.67	0.35	.09	.10	-.05	—
5. Number of creative ideas	0.46	0.68	.03	.13	.36**	.63**

** $p < .01$

Table 2
Fluency, average creativity, and number of creative ideas as a function of regulatory focus

	Fluency	Average creativity	Number of creative ideas
Prevention focus	5.28 (2.60)	1.63 (0.31)	0.30 (0.50)
Promotion focus	5.36 (2.90)	1.71 (0.38)	0.63 (0.80)

Note. Values in parentheses indicate standard deviations.

Table 3
Hierarchical regression analysis testing the relation of regulatory focus to creative performance

Predictor	Fluency			Average creativity			Number of creative ideas											
	Step 1		Step 2	Step 1		Step 2	Step 1		Step 2									
	b	β	p	b	β	p	b	β	p									
Intercept	5.28	< .001		5.20	< .001		1.67	< .001		1.63	< .001		0.46	< .001		0.28	< .002	
Prevention focus subscale	-0.62	-.26	< .007	-0.61	-.26	< .007	0.03	.09	.363	0.03	.09	.352	0.01	.02	.850	0.01	.02	< .002
Promotion focus subscale	0.16	.06	.552	0.17	.06	.540	0.03	.09	.353	0.04	.10	.315	0.1	.13	.181	0.11	.15	.119
Experimental condition				0.15	.03	.756				0.08	.11	.250				0.35	.26	< .006
R^2	.07		< .024	.07		< .056	.02		.391	.03		.361	0.02		.387	.09		< .022
ΔR^2				.00		.756				.01		.250				.07		< .006

と判断された回答であった。このため最終的には 112 名（予防焦点条件 56 名，促進焦点条件 56 名）を分析対象とした。

制御焦点尺度の促進・予防焦点得点，流暢性，創造性平均，そして創造的な回答数の平均値と標準偏差，ならびに変数間の相関関係を Table 1 に示す。相関関係を確認すると，制御焦点尺度の予防焦点得点と流暢性が負の相関を示していた。これは予防焦点の特性的傾向が強くなるほど，UUT への回答数が減ることを示しており，Haws et al. (2010) と整合的な結果であった。しかし，その他の変数（創造性平均，創造的な回答数）においては制御焦点尺度と意味のある相関関係はみられなかった。また，Table 2 には UUT に対する各指標の制御焦点条件ごとの記述統計値を示した。

続いて，本研究の主な検討対象である義務・理想自己プライミングが UUT に与える影響について階層的重回帰分析を使用して確認した。分析では，ステッ

プ 1 に制御焦点尺度の促進・予防焦点得点を統制変数として投入し¹，ステップ 2 で実験条件（0 を予防焦点条件，1 を促進焦点条件とダミー変数化）を投入した。こうして実験条件が UUT の各指標（流暢性，創造性平均，創造的な回答数）を予測するのについて確かめた（Table 2）。分析の結果，創造的な回答数に対してのみ制御焦点を操作したことによる影響が確認された ($b = 0.35, p < .006$)。これは，平均的な促進・予防焦点傾向を有する個人に対して予防焦点を活性化する義務プライミングを行う場合，中点を超えて創造的だと評価される回答数は平均して 0.28 個であるが，理想プライミングによって促進焦点を活性化する場合は，創造的な回答数が上昇し，平均して 0.63 個になることを示している。このように創

1 解釈の簡便化のためこれらの統制変数は中心化したうえで分析に使用した。

造的な回答数においては義務・理想自己プライミングの効果が確認されたものの、流暢性 ($b = 0.15, p > .75$) や、創造性平均 ($b = 0.08, p > .24$) について制御焦点を操作したことによる影響は確認できなかった。

考 察

本研究では、義務・理想自己プライミングが創造的パフォーマンスに与える影響について創造性課題の1つであるUUTを用いて検討した。迷路課題により制御焦点を操作したFriedman & Förster (2001)では、UUTにおける「創造性平均」と「創造的な回答数」の両指標において、予防焦点と比較して、促進焦点の優勢性が示されていた。さらにBaas et al. (2011)では以上の創造性指標に加えて、「流暢性」においても促進焦点の優勢性が確認されていた。これらの知見を踏まえ、本研究では促進焦点の優勢性が明らかにされた以上の3指標を従属変数として実験を行った。その結果、先行研究と同様に促進焦点の優勢性がみられた指標は創造的な回答数のみであり、創造性平均と流暢性においては義務・理想自己プライミングによる影響は確認できなかった。

このことから本研究では、義務・理想自己プライミングによって制御焦点を操作する場合でも、創造的パフォーマンスが影響を受ける可能性は担保されるものの、迷路課題による制御焦点の操作と比較し、その効果が弱まる可能性が示された。この可能性についてより詳細に検討するため、促進焦点の優勢性が確認された「創造的な回答数」に対して、Friedman & Förster (2001)と同様の分析法を用いて効果量を算出し、当該研究との効果量の比較を行った。その結果、Friedman & Förster (2001)では中程度の効果量が示されていたが ($r = .34$)、本研究では効果量の低下が確認された ($r = .25$)。このような効果量の比較からも義務・理想自己プライミングが創造的パフォーマンスに与える影響は弱いことが確認された。

なぜ制御焦点の操作方法を変更することで、制御焦点が創造的パフォーマンスに与える影響が変化するのでしょうか。この疑問について接近・回避動機づけに関する先行研究の知見をもとに解釈してみる。利得に接近し、損失を避ける接近・回避動機づけに関する先行研究では、回避動機づけは創造的パフォーマンスを低減させることが明らかになっている (e.g., Friedman & Förster, 2005)。そして迷路課題は、回避的側面を強調することで予防焦点を活性化するが、義務・理想自己プライミングは予防焦点を活性化する際に回避的側面を含まない。こうしたことから、義務・理想自己プライミングでは、予防焦点を活性化する際に回避動機づけを高めないことが原因となり、創造的パフォーマンスに与える影響が減弱した、との解釈を提起できる。このように接近・回避動機づけに関する先行研究や、迷路課題と義務・理想自

己プライミングの内容的な差異に着目することで、本稿の結果について一定の解釈を提起できる。しかしながらこうした解釈は結果を受けての事後的なものであるため、解釈の確からしさを今後検証していく必要がある。

このように本研究では、義務・理想自己プライミングにより制御焦点を操作した場合、制御焦点が創造的パフォーマンスに与える影響が弱くなる可能性が示された。この一方で創造的な回答数に対しては効果量は小さいものの制御焦点を操作したことによる影響が確認されたことを踏まえると、回避的側面を含まない義務・理想自己プライミングが創造的パフォーマンスに影響する可能性が依然として担保されるといえる。この可能性を支持するように、Friedman & Förster (2001)のパーソナリティ傾向に着目した相関研究では義務の達成を重視するパーソナリティ傾向をもつ個人ほど、連続して呈示される断片的な情報を統合して対象を予測する洞察課題の成績が悪く、理想の達成を重視する個人ほど成績が良くなることを示している。このように先行研究と本稿の結果から、異なる接近対象 (理想もしくは、義務) をもつことで、創造的パフォーマンスが左右される可能性を指摘できる。このため、後続研究では目標志向性のうち接近・回避の側面に着目するだけでなく、どの対象に接近するのかに着目した実験デザインを用いることで、接近動機づけが創造的パフォーマンスを促進するためのより具体的な条件を明確にできるものと考えられる。

最後に本研究の限界と意義について述べる。まず本研究の限界として挙げられるものは、実験の実施形態に関するものである。本研究では統制のとれた実験室での実施ではなく、インターネット接続されたパソコンを介して回答するという形態であった。このため、実験室実験に比べて、ノイズを多く含む環境で回答が行われた可能性がある。こうしたノイズが義務・理想自己プライミングそのものの操作の影響を減じ、操作が不十分であったために創造的パフォーマンスに対する影響が低下した可能性を否定できない。加えて本研究の限界点として、制御焦点の操作を行わない統制条件を含まなかった点があげられる。こうした方法論的な制限のために、本稿で示された「創造的な回答数」における促進焦点の優勢性は「促進焦点が創造性を高めた」ことによるのか、「予防焦点が創造性を低めた」ためなのか、それとも「両者の影響が合わさった」ためなのか判別ができない。これらはいずれも本研究の限界点である。以上の限界点を克服するために、今後は実験室環境において統制条件を加えたくて再現研究を行い、本稿で得られた知見について厳密に検討していく必要があるだろう。

以上のような限界があるものの、本研究は義務・理想自己プライミングが、効果量が小さいながらも、

創造的パフォーマンスを左右する可能性を示した。本稿で得られたこの知見は、人の目標志向性と創造的パフォーマンスとの関係を検討するためには、従来までの接近・回避動機づけの枠組みを超えて、制御焦点理論にもとづき、接近・回避対象の質的な差異に着目したうえで研究を行う必要性を示すものである。このように本研究は、目標志向性と創造的パフォーマンスの関係を検討する研究文脈に対して、今後の研究の道筋を示すものであると考えられ、研究意義が認められる。また、現代社会では従来どおりの解決方策が適用できない高度で複雑な問題解決能力（すなわち、創造性）が必要とされている。このため、制御焦点が創造的パフォーマンスに影響する可能性を示した本研究は、創造性を向上させるための方略についても示唆を与えるものであり、社会的に意義のある知見を提供できたものと考えられる。

引用文献

- Amabile, T. M. (1983). The social psychology of creativity: A componential conceptualization. *Journal of Personality and Social Psychology, 45*, 357-376.
- Baas, M., De Dreu, C. K., & Nijstad, B. A. (2008). A meta-analysis of 25 years of mood-creativity research: Hedonic tone, activation, or regulatory focus? *Psychological Bulletin, 134*, 779-806.
- Baas, M., De Dreu, C. K. W., & Nijstad, B. A. (2011). When prevention promotes creativity: the role of mood, regulatory focus, and regulatory closure. *Journal of Personality and Social Psychology, 100*, 794-809.
- Boldero, J. M., & Higgins, E. T. (2011). Regulatory focus and political decision making: When people favor reform over the status quo. *Political Psychology, 32*, 399-418.
- Chen, Y. A., & Bei, L. (2017). Reviewing regulatory focus based on four regulatory forms. *Review of General Psychology, 21*, 354-371.
- De Dreu, C. K. W., Baas, M., & Nijstad, B. A. (2008). Hedonic tone and activation level in the mood-creativity link: Toward a dual pathway to creativity model. *Journal of Personality and Social Psychology, 94*, 739-756.
- Friedman, R. S., & Förster, J. (2001). The effects of promotion and prevention cues on creativity. *Journal of Personality and Social Psychology, 81*, 1001-1013.
- Friedman, R. S., & Förster, J. (2005). Effects of motivational cues on perceptual asymmetry: Implications for creativity and analytical problem solving. *Journal of Personality and Social Psychology, 88*, 263-275.
- Gino, F., & Margolis, J. D. (2011). Bringing ethics into focus: How regulatory focus and risk preferences influence (Un) ethical behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes, 115*, 145-156.
- Haws, K. L., Dholakia, U. M., & Bearden, W. O. (2010). An assessment of chronic regulatory focus measures. *Journal of Marketing Research, 47*, 967-982.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist, 52*, 1280-1300.
- Higgins, E. T., & Cornwell, J. F. M. (2016). Securing foundations and advancing frontiers: Prevention and promotion effects on judgment & decision making. *Organizational Behavior and Human Decision Processes, 136*, 56-67.
- Liberman, N., Idson, L. C., Camacho, C. J., & Higgins, E. T. (1999). Promotion and prevention choices between stability and change. *Journal of Personality and Social Psychology, 77*, 1135-1145.
- Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002). Motivation by positive or negative role models: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology, 83*, 854-864.
- 尾崎 由佳・唐沢 かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性—制御焦点理論に基づく検討— 心理学研究, 82, 450-458.
- Sacramento, C. A., Fay, D., & West, M. A. (2013). Workplace duties or opportunities? Challenge stressors, regulatory focus, and creativity. *Organizational Behavior and Human Decision Processes, 121*, 141-157.
- Silvia, P. J. (2015). Intelligence and creativity are pretty similar after all. *Educational Psychology Review, 27*, 599-606.
- Silvia, P. J., Winterstein, B. P., Willse, J. T., Barona, C. M., Cram, J. T., Hess, K. I., ... & Richard, C. A. (2008). Assessing creativity with divergent thinking tasks: Exploring the reliability and validity of new subjective scoring methods. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts, 2*, 68-85.
- Summerville, A., & Roese, N. J. (2008). Self-report measures of individual differences in regulatory focus: A cautionary note. *Journal of Research in Personality, 42*, 247-254.
- 山岡 明奈・湯川 進太郎 (2016). マインドワンダリングが創造的な問題解決を増進する 心理学研究, 87, 506-512.

—2018.9.29 受稿, 2018.11.21 受理—